

日本語教員主導型 学生ボランティア・チューター・システムの内容と 効果に関する研究

—チューターへのインタビュー調査から—

松下達彦, 半谷優子

キーワード: チューター、自律学習、留学生、サポート、ネットワーク、日本語教員養成

要旨: 日本語教員の主導による、文科系中心の私立大学における、学生ボランティア・チューター34名を対象に半構造的インタビューを実施した。チューター学生には異文化指向性の非常に高い学生が選任されており、チュートリアルの内容は、日本語サポートと日常生活や文化についての話題が高い割合を占めるが、勉強のサポートに関しては、アジア系の学生が大半を占める学部・大学院留学生対象のほうが、書くことのサポートが多く、内容も幅広い。多くのチューターが話し方や内容について相手に配慮をしているが、学部・院留学生に対しては、文化的な面への配慮が多いのに対し、英語圏出身学生を中心とする1年コース留学生に対してはわかりやすさや学習効果面への配慮が目立ち、困難点の大半も日本語初中級レベルの学生に対する言語サポートの問題である。チューター学生の期待と効果を比較すると、先行研究同様、他者理解、援助や交流への効力感はあるが、それに加えて、日本語に対する気づきや、日本語教員養成へのプラスの効果が、日本語教員主導のシステムの特徴として指摘できる。一方、日本語教員の主導であるため、留学生の言語について学ぶことや、留学で学んだ知識や言語を活かし、忘れないようにするといった目的は期待はずれに終わることが多い。事前連絡のなかった変更や中止を経験した学生も4分の1ぐらいおり、このようなケースでは交流が十分にできていなかったと考えられる。チューター経験者によるシステムの改善に関する提言は「チュートリアルへの支援、システムの整備」と「ネットワーク化の要望」の2点に大別される。

1. 問題の設定

本稿でいうチューターとは、一般に授業外の時間を活用し、いわゆる外国人留学生などに対して学習や生活面での個別的援助をする学生を指すものとする。

日本の大学におけるチューターは主として国立大学において謝金が支払われる形で運用されてきており、その効果や問題点に関する研究や報告として碓氷(1982)、権藤・白土(1988)、田中(1995)(1996)、田中ほか(1996)、村田(1996)、瀬口ほか(1997)、瀬口・田中(1999)、桜田ほか(2000)、山崎(2002)、吉川(2003)などがある。これらの研究や報告では、主として異文化間心理や留学生支援システムの問題が追究されている。学内外のボランティアの活用例として大島(1999)、

大島・永淵(1999)、金田(2001)などの報告もある。

一方、日本語学習支援の一環としてチューターの活用を考える日本語教員も少なくない(岡崎(1990)、松下(1998)、三牧ほか(1999)、岡田(1999)、松本(2001)など)。近年の言語学習理論においては、学習者の多様化に対応する学習の個別化が重視され、言語教育においても教育者の介助を受けながら自律的に学習を進めることの重要性が提唱されている(田中・斉藤(1993)、Pemberton ほか編(1996)など)。言語習得に有効なインターアクションを得る場としても、動機づけを高め、目標言語社会への積極的関与を保証する場としても、教室外での人間関係が重要である。

また、社会教育の視点から、多数派である母語話者と少数派である学習者の接触を捉え直せば、よりよいコミュニティ形成を目指して両者が協力する場としてチュートリアルを位置付けられ、言語教育者がそのような視点に立てば留学生が抱える問題の解決を支援するネットワークの仲介者となることができる。留学生に対するサポート・ネットワークにおいて、日本語教員はいくつかの点で援助者として独自の属性をもっている(松下(1999))。

本稿の調査対象校は日本の大都市近郊の、文科系4学部と大学院1研究科からなる中規模私立大学(学生数は調査当時、約五千余人)である。留学生総数は調査当時で約200人であった。チューターを登録制の学内システムとして運用し始めたのは1997年度からである。1枚の登録用紙で、チューターと、日本語クラスにボランティアで参加するクラスゲスト(ピジター)の両方に登録できる形式になっていた(松下(1998))。(調査の2年後、学生グループによる運営に移管し、教員が側面支援する形に発展した。詳しくは齋藤(2002)、平ほか(2003)、吉田ほか(2003)を参照。)

本稿では、システムの改善に資するため、チューターになった学生のみを対象として、異文化接触や言語学習支援の場における学びの内容、システムの利点と問題点などについて調査した結果を報告する。

本稿が田中(1995)(1996)、村田(1996)などの日本における主要な先行研究と比べて条件的に異なる点は、日本語教員の主導によること、文科系中心の私立大学のシステムであること、無償ボランティアのシステムであることなどで、結果的に、異文化・異言語の理解を含む学習支援が中心で、国立大学に多い渡日直後の生活適応支援や理工系の学習支援などは、相対的に少ない。

2. 調査対象者・調査方法等

調査対象者: 調査校において1998年度秋学期(授業期間: 1998年9月～1999年1月)に留学生対象のボランティア・チューターになった学生34名である。チューター希望者約80名から一定の基準により選任された学生である。調査対象者の属性に関しては調査内容に含まれているので、3. で後述する。

なお、チュートリアルの相手である留学生は、中国・韓国・台湾の学生で大半を占める学部課程の学生と、英語圏の学生を中心とする1年間の留学プログラムに参加している学生が半数ぐらいずつである(延べ人数の出身地別内訳: 中国9、アメリカ5、パキスタン5、オーストラリア4、イギリス4、インド2、台湾2、カナダ1、韓国1、モンゴル1)。

調査方法: 事前に質問紙を渡して回答を用意しておいてもらった上で、電話による半構造的インタビューを実施した。はじめに電話で承諾を得て電話インタビューの日時の約束をしてから質問紙を郵送し、再度、電話してインタビューを行なった。インタビュー時間は一人平均56分(標準偏差17分)である。

質問内容: 田中(1996)、箕浦(1992)などを参考に、独自の内容を加えて作成した。専攻、学年等の属性、日本語教育学関連の履修科目、使用言語と学習言語、海外渡航経験、留学生との接触経験、志望動機、チュートリアルの内容や工夫、よかった点、よくなかった点、システムに対する意見など、約60の小項目からなる。

調査時期: 1999年3月下旬～4月中旬で9割以上(31名)終了、ほか4月下旬・5月初旬・6月初旬が各1名。ただし、回答者の背景調査はチューター登録時(1998年9月～10月)の時点である。

3. 分析観点と結果

3.1 調査対象者の属性および在外経験、海外への関心、留学生交流に対する志向

性別・年齢: すべて20歳～24歳の女子学生である。年齢、性別等による応募の制限はないが、空き時間等の一定の基準にしたがって選任した結果、そのようになったものである。在学生の男女比は3:7程度であるにも関わらずチューター希望者の95%以上が女性である。その理由は不明であるが、女子学生のほうが異文化交流や言語への関心が高いという科目履修の傾向とも一致する。他校でも同様の傾向があるようである。それが調査対象校もしくは日本社会における特定の傾向なのか、世界的な傾向なのかはわからないが、男性に異文化や言語に対する関心が欠ける傾向があるのだとすれば、問題である。また、男性の留学生が同性のチューターを希望するケースもあるが、要望に応じられないケースがある。

所属学科・専攻(表1): 国際学科生25名のうち、13名は比較文化学コース所属もしくは希望の学生で、ほかは地域研究(アジア・アメリカ・日本)コース、国際関係コースの学生である。学部別の在生比から考えると、国際学科、英語英米文学科に著しくかたよった分布である。チュートリアルの対象である留学生の専攻が経済やビジネスであるケースが多いことを考えると、もう少し経済、ビジネスを専攻する学生の応募があるとよいのだが、現状はそうっていない。

所属学年(表2): 日本語教員養成関連科目の履修経験等も選考基準になっているため上級生が多いが、4年生は就職活動等で忙しいため、3年生が一番多い。

副専攻: 日本語教員養成の科目群である「日本語教育学基礎コース」の既修科目数は平均2.1で、履修中の科目数の平均は1.1である。

母語: 全員、日本語である。使用言語による応募の制限はないが、日本語母語話者以外の応募はな

表1 所属学科・専攻

国	際	25
英 語	英 米 文 学	7
経	済	1
ビ	ジネスマネージメント	1

表2 所属学年

1	年 生	3
2	年 生	7
3	年 生	16
4	年 生	8

表3 海外渡航回数

4	回 以 上	22
3	回	4
2	回	5
1	回	2
な	し	1

かった。

第1外国語: 全員、英語で、ある程度使える(「対人関係に応じた言語表現の使い分けが、基本的にできる。通常の速さの会話が聞き取れ、話の内容がほぼ理解できる」もしくはそれ以上)と自覚している学生が26名(76%)である。

第2外国語の学習経験者: 31名(91%)で、三つ以上の外国語の学習経験者14名(41%)であるが、「対人関係に応じた言語表現の使い分けが、基本的にできる。通常の速さの会話が聞き取れ、話の内容がほぼ理解できる」もしくはそれ以上)と自覚している学生は皆無であった。

海外渡航回数(表3): 4回以上渡航している学生が圧倒的に多く、6カ月以上の在外経験がある学生が16名(48%)おり、うち1年以上の留学の経験者は10名(29.4%)いた。これは一般の学生に比べてかなり在外経験が多いグループと言えるであろう。

海外事情への関心: 海外記事(表4)や海外テレビ番組(表5)については、ほとんどの学生が関心があると答えている。

留学生との付き合い: ほぼ全員が何らかの形で関わっている(表6)が、7割強の学生が留学生と学内で知り合う機会が少なく感じており(表7)、ほぼ全員が交流する機会があれば参加したいと思っている(表8)。また、留学生と混合の寮に住むことに関しても、ほぼ全員が肯定的な意見をもって(表9)。

以上の内容を総合すると、今回、調査対象としたチューター学生は、異文化指向性が非常に高く、具体的特徴は以下の3点にまとめられる。

- (1) 海外との関わりの強い学科に属している学生が多く、海外事情に関心が高い。
- (2) 留学生と積極的に関わりをもちたいと望んでいる学生が多い。
- (3) 留学経験・海外在住経験があり、英語がある程度使えると自覚している学生が多い。

これは教員の依頼によるチューターの多い岡田(1999)や理工系の多い村田(1999)などの先行事例とは大きく異なる。

表4 あなたは記事のうち、海外記事をどの程度よく読みますか。

非常に関心をもってよく読む方だ	4
かなり関心をもって読む	17
少し関心がある	13
あまり関心がない	0
全く関心がない	0

表5 テレビ番組のうち、海外番組をどの程度よく見ますか。

非常に関心をもってよく見る方だ	7
かなり関心をもって見る	19
少し関心がある	6
あまり関心がない	1
全く関心がない	0
関心はあるが家にテレビがない	1

表6 あなたは留学生とどのように関わったことがありますか。(複数回答可)

あいさつ、または簡単な日常会話を交わしたことがある	28
同じ講義を受けたことがある	20
一緒に食事をしたり休日を過ごしたりしたことがある	14
勉強のことで相談される	13
生き方、考え方などについて話し合ったことがある	11
同じクラスにいる	6
生活のことで相談される	5
特に関わりはない	4
同じ研究室(ゼミ)にいる	3
同じサークルにいる	2
近所、または同じ下宿(寮)に住んでいる	1

表7 学内で留学生と知り合う機会についてどう感じていますか。

少なすぎると思う	5
少ないと思う	21
ちょうどよい	6
多いと思う	2
多すぎると思う	0

表8 もし学内で留学生と交流する機会があったらどうしますか。

ぜひ参加したい	29
条件によっては参加したい	4
あまり興味がない	1

3.2 学部・院留学生と1年コース留学生のチュートリアル内容および留意点・困難点の違い

チュートリアルの対象となった留学生には、学部・大学院の課程に所属する留学生(以下、「学部・院留学生」と、1年間の留学プログラムに参加する留学生(以下、「1年コース留学生」)がいた。学部・院留学生は、中国・韓国・台湾の学生で9割以上を占め、基本的には一般の日本人学生と共に授業を受けている。日本語能力は、中・上級である。1年コース留学生は、アメリカ・イギリス・インド・オーストラリア・カナダ・パキスタンなど英語圏の学生を中心としており、日本語能力は、ほとんど初・中級(未習者も含む)であった。一部の調査項目では、対象のタイプの違いにより留意点や困難がどう異なるかも分析、考察した。

表9 寮に入ると仮定して、その寮が留学生と日本人と一緒に住むようになっているものだったとしたら、どうしますか。

そのような寮なら喜んで入るし、ぜひ留学生とも同室してほしい	21
留学生と同室でも、日本人と同室でもどちらでもいい。そのような寮に入ることを希望する	11
少しは気になるが、とにかく寮に入る	1
日本人と同室ならいいが、留学生と同室なら他の下宿を探す	1
留学生と一緒に嫌なので他の下宿を探す	0

3.2.1 チュートリアルの頻度・内容

チュートリアルの頻度は週平均で1.18回(標準偏差0.51回)である。通常は週1回だが、ときどき週に2回以上の学生がいるということである。

全体としてみるチュートリアルの内容(表10)は、「日常なおしゃべりをする」が最も多いが、「日本語の授業の補習」、「日本語の語句や表現について説明する」、「発音を直す」などの日本語に関する内容も多い。また、社会文化的側面の学習について見ると「留学生の出身国・地域のことについて話し合う」が「日本の文化・社会や習慣に関する質問に答える」より多く、どちらかという留学生の方が与える側になっている様子が見える。

学部・院留学生と1年コース留学生を、それぞれの選択肢の回答数が、チュートリアル対象の学部・院留学生/1年コース留学生数に占める割合で比較すると以下ようになる。

両者に共通して多いチュートリアル内容は、以下の4点である。

- g : 日常なおしゃべりをする(学部・院: 85% 1年: 76%); 家族のことなど
- a : 日本語の授業の補習(学部・院: 62% 1年: 76%)
- 学部・院留学生: 漢字の読み、語句、読解、漫画、

表10 チュートリアルの内容
(主にどんなことをしましたか) (複数回答可)

g : 日常なおしゃべりをする	30
a : 日本語の授業の補習	27
m : 留学生の出身国・地域のことについて話し合う	27
j : 日本語の語句や表現について説明する	25
i : 発音を直す	23
h : 漢字にふりがなを付けたり、漢字・漢字語の説明をしたりする	19
l : 日本の文化・社会や習慣に関する質問に答える	14
k : 日本語の文法の説明をする	11
e : 日本語の作文やレポートを添削する	10
f : テーマを決めて日本語でディスカッションをする	7
r : 一緒に食事をしたり遊んだりする	7
b : その他の授業の補習	6
n : 国際社会の問題などについて話し合う	6
s : 生活の相談にのる	6
c : 授業とは無関係の勉強	5
d : 日本語の読解の材料を決めていっしょに読む	3
q : 学外での案内・買い物などの付き添い	3
o : 通訳・翻訳	1
p : 学内での案内・各種手続きの手助け	0
t : その他	4

劇の練習、作文・レポート、宿題プリントなど

1年コース留学生: 予復習・テスト対策、漢字の読みかた、ひらがな・漢字の書きかた、語句の意味・用法、文法(助詞・動詞の自他・副詞等)、教科書の音読、短文作成、テーマ作文・レポート、プリント、既修語句を使った会話など

m: 留学生の出身国・地域のことについて話し合う(学部・院: 85% 1年: 67%): イギリス人のコミュニケーション・スタイル、イスラム教原理主義、インドのコンピュータ事情、パキスタンの演劇・衣装、気候、建築物、宗教の戒律、家族、シドニーの繁華街、モンゴル人の日本の政治状況に対する理解、中国の気候や建物の作り、進学率と大学生の就職、新疆ウイグル自治区の少数民族、台湾料理や囲碁の話などが話題の例として挙げられた。

j: 日本語の語句や表現について説明する(学部・院: 71% 1年: 54%): ことわざを教えあう、為替の記事の用語など

学部・院留学生に対して多いチュートリアル内容は、以下の2点であった。

e: 日本語の作文やレポートを添削する(学部・院: 46% 1年: 14%): レポート・手紙・日記など

b: その他の授業の補習(学部・院: 38% 1年: 5%): 歴史、イスラム文化、情報処理、基礎演習、国際経済など

1年コース留学生に多いチュートリアル内容としては、以下の2点が挙げられる。

i: 発音を直す(学部・院: 31% 1年: 81%): ラ行音[l]と[r]、文章の音読など

k: 日本語の文法の説明をする(学部・院: 15% 1年: 38%): 助詞・動詞の自他・副詞など

以上を総合すると、どちらのタイプの留学生に対しても日本語サポートと日常生活や文化についての話題が高い割合を占めるが、勉強のサポートに関しては、学部・院留学生のほうが、書くことのサポートが多く、内容も幅広いということが言える。これは事務手続きの手伝いが多く日本語のサポートが40%に満たない村田(1996)とは大きく異なるが、田中(1996)と比べると、手続き・住居探し・通訳等が少ないことを除けば、よく似た数値である。

3.2.2 留意点(気を付けていたこと、心がけていたこと、工夫していたこと)

全体として見る留意点(表11)を見ると、全体的には確認、言い換え、図示などのストラテジー使用を含めた話し方への配慮、相手の希望の確認、使用言語の選択などが上位に来ているが、学部・院留学生と1年コース留学生のあいだには若干の違いが見られる。それぞれの選択肢の回答数が、チュートリアル対象の学部・院留学生/1年コース留学生数に占める割合で比較すると以下ようになる。

両者に共通して多い留意点は以下の3点である。

a: 話し方(学部・院: 62% 1年: 76%): これは、以下の諸点に分類することができる。

* 言語規範: きれいな日本語を話す。正しい日本語を使う。丁寧な日本語を使う。標準語で話す。

* 発話スタイル: できるだけずれた話し方をしない。くだけすぎない。はっきり発音する。助詞等に注意して話す。なるべく自然に話す。

* 語彙選択: 通じない略語を使わない。若者語を使わない。仲間内のことばを使わない。指示語を

多用しない。語尾を丁寧にする。(相手の希望により、)なるべく敬語を使う。相手が授業で習った表現を意識的に使う。

*発話速度: ゆっくり、早口にならないように話す。できるだけ普通の速さで話す。

*その他: 相手が間違えたときに直してあげる。筆談・図示・ジェスチャーのため、近くで話すようにしていた。

h: 自分の言っていることが通じているかどうか確かめながら話す(学部・院: 62% 1年: 62%)

m: 留学生の希望を確認する(学部・院: 54% 1年: 57%)

学部・院留学生と1年コース留学生のそれぞれに対する留意点を項目別に見て、学部・院留学生に対して相対的に多い留意点には、以下の2点がある。

k: 相手の文化や言語に興味を示す(学部・院 54% 1年: 33%)

r: 時間に遅れたり、休んだりしないようにする(学部・院 54% 1年: 43%)

1年コース留学生に対して多い留意点としては、以下の3点が挙げられる。

c: 説明の仕方(学部・院: 38% 1年: 71%)

*わかりやすさへの配慮: 相手にわかることばで説明する。具体例を入れる。区切って説明する。混乱しないようにわかる範囲ではっきり言う。曖昧な言いかたをしない。動詞がわからないときにジェスチャーを使う。

*学習効果への配慮: 一つのことばを多くのちがったことばで説明する。まずわかりそうな日本語で、通じないときは英語で説明する。相手のわかる日本語で話す。英語で言えることも日本語で言う。相手の希望によりくだけたスタイルとかしこまったスタイルを使い分けた。事前になんたときの日本語なのかを言うようにする。

d: 使用言語(なるべく日本語で話す、なるべく留学生の理解できる言語で話すなど)(学部・院 23% 1年: 71%)

g: 相手の言っていることがわからなかったときは一つ一つ確認する(学部・院: 31% 1年: 62%)

以上を総合すると、話し方やチュートリアルの内容について相手に配慮をする点は共通であるが、学部・院留学生に対しては、文化的な面への配慮が他の面を上回るのに対し、1年コース留学生に対

表11 留意点(チュートリアルで気を付けていたこと、心がけていたこと、工夫していたこと)(複数回答可)

a: 話し方	25
h: 自分の言っていることが通じているかどうか確かめながら話す	22
c: 説明の仕方	21
m: 留学生の希望を確認する	20
d: 使用言語 (なるべく日本語で話す、なるべく留学生の理解できる言語で話すなど)	19
g: 相手の言っていることがわからなかったときは一つ一つ確認する	19
r: 時間に遅れたり、休んだりしないようにする	17
f: 留学生が話しているときはそれを妨げない	15
k: 相手の文化や言語に興味を示す	14
o: チューターの時間外でも話しかけて仲良くなろうとする	14
j: 図示ジェスチャーを用いる	10
i: 筆談を用いる	9
q: 約束などの確認をきちんとする	9
e: こちらから積極的に話しかける	8
l: 日本の文化や言語をよく知ってもらおうとする	8
b: 話題	5
n: チューターとして自分ができていることを示す	4
p: 準備をきちんとする	3
s: 必要以上に深く関わらない	2
t: 意見の対立を避ける	0
u: 相手が異性の場合、人目につかないところに行かないなど気をつける	0
v: その他	2

してはわかりやすさや学習効果の面への配慮が目立つ。これは前者のほうが日本語能力が相対的に高いこと、前者の多くが非英語圏の学生であるため、相手の文化や言語に関心を示すことへのニーズが相対的に高まることが原因として考えられる。

3.2.3 困難点(困ったこと、難しかったこと、やりにくかったこと)

全体として見る困難点として、自分の知識や技能の不足をあげる回答が目立った。学部・院留学生と1年コース留学生を、それぞれの選択肢の回答数が、チュートリアル対象の学部・院留学生/1年コース留学生数に占める割合で比較してみたが、両者に共通して多い困難点と学部・院留学生に対して多い困難点は抽出できなかった。

それに対し、1年コース留学生に対して多い選択肢には以下の3点が挙げられた。

j : 日本語の音声・文法・語彙・表現・教授法などに関する自分の知識不足(学部・院 31% 1年: 67%): 語彙、助詞の用法、文末表現など。

c : 自分の外国語運用能力の不足(学部・院 0% 1年: 24%): 語彙不足。元気づける表現など、もつと英語ができればよかった。

b : 自分の日本語能力の不足(学部・院: 15% 1年: 38%): うまく説明できない。漢字の知識があやふやだった。多義的な表現など、どこまで説明するかが難しい。

c.とb.に関して詳しく見ると、英語を使用した学生は9名(26.5%)で、英語圏の学生でも中上級以上では日本語のみでコミュニケーションしている。以上を総合すると、困難点の大半が初中級の学生に対する言語サポートの問題であることがわかる。日本語に関する専門知識の不足をあげる声が多いのは田中(1996)などの多くの先行事例と異なっているが、これは日本語教員の主導のシステムで、学習面でのサポートを主な目的とするシステムだからであろう。

また、約束を守らないという声が8人(23.5%)あるが、これは田中(1995)などの先行事例でも指摘されている。言語運用能力、文化差などいくつかの要因があるように思われるが、何らかの積極的な対策が必要である(3.5 および「補遺」のA参照)。

3.3 期待と効果

チューターへの志望動機(表13)とチューターをやっ

表12 困難点(困ったこと、難しかったこと、やりにくかったこと)(複数回答可)

j : 日本語の音声・文法・語彙・表現・教授法などに関する自分の知識不足	17
b : 自分の日本語運用能力の不足	10
n : 約束を守ってくれない(時間に遅れる、無断・突然のキャンセルなど)	8
i : 日本の文化や社会に関する自分の知識不足	7
f : 留学生の出身国・地域に関する知識の不足	6
a : 留学生の日本語運用能力の不足	5
c : 自分の外国語運用能力の不足	4
e : 自分の総合的なコミュニケーション能力の不足	4
g : 留学生の専門に関する自分の知識不足	4
d : 留学生の総合的なコミュニケーション能力の不足	2
q : 異性であるためよくない点がある	2
k : 文化的な価値観や習慣の違い	1
l : 過度な依存や難しい依頼をされる	1
o : 何をすればいいのかわからない	1
p : 年齢が離れていてよくない点がある	1
s : 性格が合わない	1
t : 特になし	1
h : 留学生の希望する(留学生の専門以外の)補習分野に関する知識不足	0
m : あてにされない・信用されない	0
r : 社会経験・生活環境や興味・関心に自分と共通点が少ない	0
u : その他	5

てよかったこと(表14)の質問項目は内容的に対応するように作成した。期待と効果の2グループで対応する項目の回答数の割合を、母比率の差の検定で調べたところ(石村1993、p.157を参照し、イエーツの補正を施して検定)、「期待(志望動機)以上の効果がみられたもの」2項目と、「期待ほどの効果がなかったもの」5項目が得られた。その他の項目には期待と効果に有意差がなかったが、双方ともに高い数値を示している項目は「期待通りの効果がみられたもの」と分類できる。

表13 チューターへの志望動機(複数回答可)

a : 留学生(外国人)と友達になりたい・交流したいから	31
b : 留学生(外国人)の文化、社会などに興味があるから	24
g : 留学生(外国人)の手伝いをしたい・力になりたいから	24
o : 自分の見聞を広げたいから	22
c : 留学生の言語(外国語)を学びたい・教わりたい・会話の練習がしたいから	19
s : おもしろそうだから	17
n : 新しい友達がほしいから	15
p : 人の役に立つことがしたい(ボランティアがしたい)から	15
e : 留学生(外国人)と接することで日本語について再認識したいから	14
d : 留学生(外国人)と接することで日本の文化や社会について再認識したいから	14
k : 日本語を留学生(外国人)に使えるようになってほしいから	12
h : 自分の留学体験・海外在住体験が役に立つと思うから	12
l : 将来、日本や日本語を紹介したり教えたりする職業につきたいので、その練習・勉強になると思うから	12
f : 自分が以前に海外留学して学んだ知識や言語を忘れないようにし、さらに伸ばしたいから	11
j : 日本文化・日本社会を留学生(外国人)に知ってほしいから	10
q : 教えることが好きだから	9
r : 以前にやったことがあり、よかったから	5
m : 副専攻「日本語教育学基礎コース」の科目の理解を深めるため	4
t : 空き時間を有効に使いたいから	4
u : 友人がやっているから	2
i : 自分がこれから留学する(したい)ので、そのために役立つと思うから	1
v : 先生にすすめられたから	0
w : その他(留学中にチュートリアルを受けて楽しかったから、留学中にチュートリアルを受けていて助かったから、自分が異文化の中で受けてきたサポートの恩返しをしたい、経済学科のチューターが少ないので)	4

表14 よかった点(複数回答可)

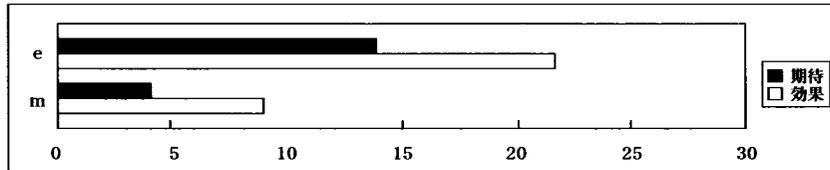
a : 留学生(外国人)と友達になれた・交流できた	27
b : 留学生(外国人)の文化、社会などの話がきけた	24
e : 留学生(外国人)と接することで日本語について再確認できた	22
g : 留学生(外国人)の手伝いができた・力になれた	21
o : 自分の見聞を広げられた	17
s : おもしろかった	17
n : 新しい友達ができた	17
c : 留学生の言語(外国語)を学べた・教わった・会話の練習ができた	14
p : 人の役に立つことができた(ボランティアができた)	14
d : 留学生(外国人)と接することで日本の文化や社会について再確認できた	14
w : わかりやすい日本語で話す練習になった	13
q : 教えることが好きで、それができた	10
l : 将来、日本や日本語を紹介したり教えたりする職業につきたいが、その練習・勉強になった	9
m : 副専攻「日本語教育学基礎コース」の科目の理解を深められた	9
k : 日本語を留学生(外国人)によりうまく使えるようになってもらった	8
h : 自分の留学体験・海外在住体験が役に立った	5
v : 忍耐・寛容・思いやりなど人格的に成長できた	5
j : 日本文化・日本社会を留学生(外国人)により多く知ってもらえた	4
t : 空き時間を有効に使えた	4
u : 食事・パーティー・レジャーなどの楽しい体験ができた	4
r : 以前にやったことがあり、それと同様によかった	3
i : 自分のこれからの留学のために役立った	2
f : 自分が以前に外国留学して学んだ知識や言語を忘れないようにできた、さらに伸ばせた	1
x : その他	3

(チューター本人の)期待以上の効果が得られたのは、以下の2項目である(図1)。

e : 留学生(外国人)と接することで日本語について再認識できた

m : 副専攻「日本語教育学基礎コース」の科目の理解を深められた

図1 期待以上の効果が得られた項目



この2項目に関する主な具体的回答は以下の通りである。

e(日本語(母語)の再認識): 助詞、オノマトペ、ものの数え方、ノダ・ノデスの使い方、接続詞、漢字など。若者語の「チョーおもしろい」。「覚えられない」と「覚えきれない」などの類義表現の違い。「いっぱい」と「たくさん」など、口語と文語のちがひ。説明や教えることの難しさに気づいた。間違えやすいところがわかった。話す時に普通体か丁寧体か迷い、敬語について再認識した。卒論テーマへの理解が深まった。ふだん何気なく使っている日本語を学習者は深く考えていることがわかった。語句の説明のときに漢字語の類義語に置き換えたらわかってくれた。「一期一会」など日本的なきれいなことばに気づいた、日本人は難しい漢字をたくさん使っているんだなあとと思った。

m(日本語教員養成科目との関連): 学んだ知識が役に立った。現代日本語学の授業で聞いた誤用が実際にあった。不明点を現代日本語学の先生に質問した。

次に、(チューター本人の)期待通りの効果が得られた項目として、以下の7項目が挙げられる(図2)。これらは期待と効果の間に有意差がなかった項目のうち、効果から見た上位7項目である。

b : 留学生(外国)の文化、社会などの話が聞けた

g : 留学生(外国人)の手伝いができた・力になれた

n : 新しい友達ができた

o : 自分の見聞を広げられた

s : おもしろかった

d : 留学生(外国人)と接することで日本の文化や社会について再認識できた

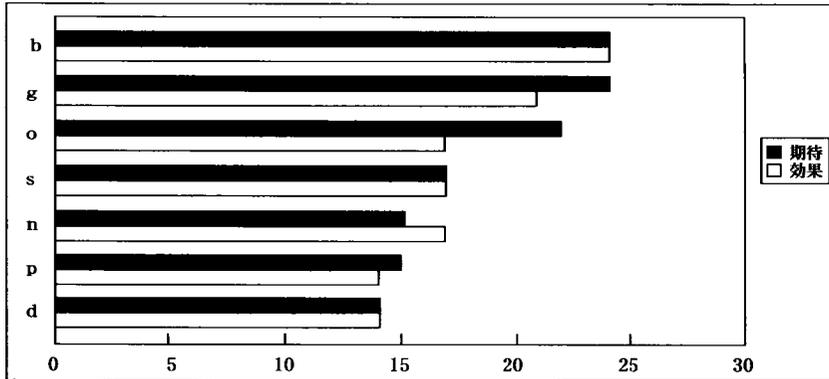
p : 人の役に立つことができた(ボランティアができた)

具体的には以下のようなコメントがあった。

b, o(他者の社会文化知識の学習): インドの結婚式でサリーを3度かえること、宗教による習慣・タブーなど、パキスタンのこと。中国の一人っ子政策のこと、経済的に余裕のある人しか留学できないこと、中国人は日本人ほど遠慮しないこと。中国の結婚の習慣のちがひ、中国の町の呼び方、中国の裏情報や知られていない観光地。宗教や演劇のこと。

g(援助への効力感): 留学生ががんばっていたので、何とかしてあげたい、日本語能力試験に受かってほしいという気持ちになれた(表15も参照)。

図2 期待通りの効果が得られた項目



n, s(交流への効力感): おしゃべりが好きな相手だった
 d(自己の所属する社会文化の再認識): 待遇表現、元号、日本食の食材、内閣制度の大統領制との違い。リストラ・不況などに対する受け止めかたのちがひ。自転車で同じ方向によけた場合に「すみません」というが、韓国ではそう言わない。日本には行事が多い。日本の会社、住宅事情、教育レベル、ちゃらちゃらした格好の女の子のこと。日本の学生は自分の国に無関心。

表15 留学生の期待にこたえられたと思うか

a. 普通以上にこたえられたと思う	4
b. 普通程度にはこたえられたと思う	16
c. 少しはこたえられたが、普通以下だったと思う	9
d. 全くこたえられなかったと思う	0
e. わからない	5

(チューター本人の)期待ほどの効果がなかったのは以下の5項目である。

- f: 自分が以前に外国留学して学んだ知識や言語を忘れないようにできなかった、伸ばせなかった
- j: 日本文化・日本社会を留学生(外国人)にあまり知ってもらえなかった
- h: 自分の留学体験・海外在住体験が役に立たなかった
- c: 留学生の言語(外国語)を学べなかった・教われなかった・会話の練習ができなかった
- a: 留学生(外国人)と友達になれた・交流できた

図3 期待ほどの効果が見られなかった項目

